

11月上旬、ハチ蜜の森キャンデルが主催する講座「紅葉の雑木林にかぼちゃランタンで小人の村作り」に参加した。両手に取るほどの小ぶりなかぼちゃをくり抜き、皮を削って透かし模様を入れる。中に自分で作った蜜ろうそくを収め、紅葉の雑木林の中で灯す。「秋にやらないと、ほんとうにもつたないことになりま〜」主催者である安藤竜二さんが一年の中で最もお待ちにしているイベントなのだと、これまでも、また近日も、何度か耳にした。「かぼちゃの中には小人が暮らしている、そんな世界をイメージしてくださいね」

安藤さんの言葉に、想像力の集中力は一気に高まった。作業する手に力が入る。「こんなに無心になったのは、ほんとうに久しぶりです」

出来上がった作品を手には、いつもは会社員という男性の言葉に頷いた。粘土遊びのように蜜ろうそくを丸め、初めて蜜ろうそくを作った。完成予想図を思い浮かべながら必死にかぼちゃをくり抜いた。お湯に浸した蜜ろうの温もり、その独特の香りと感触、手を刺さないうような慎重に走らせるナイフの音。みな少年のように瞳を輝かせながら、無心の時間を共有した。

パソコン、携帯電話、テレビ。興行きのない平坦な画面を見続ける時間の多さにハッとすると、そこはある。人間が生まれ持つ本能は、遠くかけ離れた、まったく無機質

なものに支配されていくようで、なんだか怖くなる。

ハチ蜜の森の小路に腰を下ろし、安藤さんと話したことを思い出す。木々のざわめきに風を感じ、それは汗にまみれた頬に涼しさを届け、それにくれた。その心地よさに、いつまでもこの空間に身をゆだねていたいと思った。

だが自然は刻々とその姿を変え、ハチ蜜の森はもうすぐ音に覆われる。心地よさは無縁の世界だからこそ、一時の有難さが身にしみるのかもしれない。

思い思いのかぼちゃランタンを手にした。秋の日は釣瓶落としのごとく暮れていき、冬の訪れを予感させる冷気に覆われていく。安藤さんの奥さん特製「ハチミツかぼちゃミルク」の優しい甘さに、体も心も温まる。

ふと見上げると、こぼれ落ちるばかりの星が輝いていた。揺れる気がして手を伸ばした。

翌朝 紅に染まる山の間から、しつかり雪に覆われた大朝日岳が顔を覗かせていた。朝の光を浴びて、そこだけ青々輝いていた。

「私自身が大朝日岳ですから……」そう言つて微笑む安藤さんを出した。

蜜ろうを丸めてろうそくを作り、かぼちゃを削り、森に入つて火を灯す。時間を忘れて夢になりながら、満たされている感覚に気付いていく。

人生を楽しむとはこういうことなのだろうか。小人が暮むハチ蜜の森が浮かんでくる。

森のことば

~蜜ろうそく職人、安藤竜二さんの日々~

取材・文＝川野淳子 写真＝長谷川潤

第四話 「小人の暮む森」



薄黄色や橙色、緑色。かぼちゃの種類や透け具合によって、蜜ろうそくは輝き方を変え、その光に照らされた紅葉は、暗闇に映し出される。「最も楽しみなイベント」という安藤さんの気持ち、なんとなく理解できた。来年も同じ時間を共有したいと思った。

ハチ蜜の森キャンデル
@山形県西村山郡朝日町立木825-3
☎0237-67-3260
www.mitsurou.com/
工房での販売・体験は
5月~12月の土・日・祝日のみ
(体験は事前予約)